

## 日本語で読める世代間倫理文献リスト

吉永 明弘

### はじめに

2011年3月11日の東日本大震災に伴って発生した「福島第一原発事故」は、国内のみならず、海外にも大きな衝撃を与えた。国際反核法律家協会会長のウィーラマントリーは、3月14日には、世界各国の環境担当相への公開書簡という形で「日本の原子炉の破局」という見解を発表した。彼はまた「原発の存続・拡散は将来世代への犯罪」と題する書簡を書いているが、そこには原発問題がいわゆる「世代間倫理」の問題でもあることがあらためて示されている（ウィーラマントリー（2011）「国際反核法律家協会会長ウィーラマントリー判事からの書簡\*原発の存続・拡散は将来世代への犯罪」（浦田賢治訳）『日本の科学者』Vol46. No7）。世代間倫理については、従来さかんに論じられてきたが、福島第一原発事故によってその論点の重要性が再認識されたとはいえる。すなわち、我々は過去の意思決定（原発政策）の影響を被っているのであり、同様に、現在の意思決定は将来世代に確実に影響を与えることが実感されたとはいえよう。この機会に、従来の日本の世代間倫理論を振り返ってみることも必要なことと思われる。

### 重要な翻訳文献

本稿では、そのための準備として、日本語で書かれた過去の関連論文・著作をリストアップする。他の学問分野と同様に、「世代間倫理」についての議論も外国からの輸入に始まる（そのことの是非はここでは問わない）。特に影響力があったものとして、以下の翻訳文献が挙げられよう。

- ジョン・パスモア、間瀬啓允訳（1974=1979）『自然に対する人間の責任』岩波書店
- シュレーダー＝フレチュット、丸山徳次訳・解説（1981=1990）「テクノロジー・環境・世代間の公平」『現代思想』（1990年11月号）青土社、99-117頁（シュレーダー＝フレチュット編（1991=1993）『環境の倫理（上）』119-145頁にも同論文が収録されている）
- ジョエル・ファインバーグ、鶴木奎治郎訳（1974=1990）「動物と生まれざる世代のさまざ

- まな権利』『現代思想』（1990年11月号）青土社、118-142頁
- イーディス・ブラウン・ワイス、岩間徹訳（1989=1992）『将来世代に公正な地球環境を——国際法、共同遺産、世代間衡平』日本評論社
  - ウォルター・C・ワグナー、水谷雅彦訳（1991=1993）「未来に対する道徳性」シュレーダー＝フレチェット編『環境の倫理（上）』108-118頁
  - ジョナサン・グラバー、加藤尚武・飯田隆監訳（1984=1996）『未来世界の倫理——遺伝子工学とブレイン・コントロール』産業図書
  - ハンス・ヨナス、加藤尚武監訳（1979=2000）『責任という原理——科学技術文明のための倫理学の試み』東信堂
  - デレク・パーフィット、森村進訳（1984=1998）『理由と人格——非人格性の倫理へ』勁草書房
  - ジョン・ロールズ、川本隆史ほか訳（1971=2010）『正義論 改訂版』紀伊国屋書店

## 「世代間倫理」という用語について

これらの文献における議論が、日本における「世代間倫理」論の基礎となったことは間違いない。ただし、注意すべきは、「世代間倫理」という言葉は日本独自の言葉だということである。将来世代の権利や、将来世代に対する現代世代の義務、現代世代と将来世代の間の正義といった問題は、通常は「世代間正義」（intergenerational justice）あるいは「世代間衡平」（intergenerational equity）の問題と呼ばれてきた。それが日本で「世代間倫理」と総称されるようになったのは、1991年に刊行された加藤尚武『環境倫理学のすすめ』（丸善ライブラリー）の影響によるものである。ここでは「世代間倫理」が、環境倫理学の三つの主張のうちの一つと位置付けられており、現在でもそれが環境倫理学と世代間倫理についての標準的な説明として流通している<sup>(1)</sup>。他方で、「世代間正義」や「世代間衡平」という用語は、政治/法/経済哲学の分野で用いられている。その場合、必ずしも環境倫理学の枠内にとどまらず、世代間の経済的な公平性や、福祉水準の公平性について論じられる。この分野には膨大な研究があるので、本稿では基本的に、環境倫理学における世代間倫理の議論を中心にリストアップする。

---

(1) それ以前に、「世代間倫理」という言葉は、すでにバイオエシックスに関する書物のなかに登場していた。加藤は1986年の『バイオエシックスとは何か』（未来社）において、ヨナスの議論に言及しながら「公害倫理の世代問題」を「世代間倫理」という言葉で論じている（92-98頁）。そして1987年の『二一世紀の知的戦略』には、「バイオエシックスと世代間倫理」という論考が収録されている。また、森岡正博は1988年の『生命学への招待——バイオエシックスを超えて』（勁草書房）のなかで、環境倫理学を「将来世代のための倫理学」（26頁）と紹介している。

## 現在までの議論の流れ

世代間倫理についての議論の流れを大まかに言えば、メタ倫理的考察（世代間倫理は存在するか？ 将来世代に権利はあるか？）から、規範倫理的考察（世代間倫理はどうすれば実現できるのか？ 現在世代はいかなる義務を果たすべきなのか？）に移ってきているように思われる。近年では「世代間倫理」を「持続可能性」や「予防原則」の考察へと展開させる論者も多い<sup>(2)</sup>。また、哲学者・倫理学者だけでなく、広義の環境学のなかでも世代間倫理という言葉が流通しており、具体的な場面での概念の適用が図られている。

以下は、加藤尚武の1991年の著作での紹介以降、日本語で書かれた世代間倫理関連の論文・著作をまとめたものである。加藤の環境倫理学関連の著作には、世代間倫理の論点が陰に陽に含まれているが、それら全部をリストアップすることは差し控えた。また、環境倫理学や応用倫理学の著作のなかで、世代間倫理に言及しているものは多いが、記述が短いものや、加藤の議論の引用にとどまっているものはリストアップしていない。最後に、多くの研究者による「ヨナス研究」の論文は、広義の世代間倫理についての論考といえるが、本稿ではそれらを網羅することはしなかった。以下のリストが、今後の世代間倫理の研究に資するものとなれば幸いである。

### 「世代間倫理」に関する理論的な考察—雑誌掲載論文を中心に

- 高橋久一郎（1994）「世代間倫理は必要か？」千葉大学教養部倫理学教室『プラクティカル エシックス研究』214-221頁
- 加藤尚武（1996）「環境問題における倫理学と法哲学」『法哲学年報1995 環境問題の法哲学』84-88頁
- 宇佐美誠（1996）「将来世代への配慮」『法哲学年報1995 環境問題の法哲学』139-150頁
- 西村義人（1997）「世代間倫理のダイナミクス—D. キャラハンの〈義務〉とH. ヨーナスの〈責任〉を補完する」慶應義塾大学『哲学』第101集、109-141頁
- 加藤尚武（1997）「世代間倫理の構造」『日本機械学会誌』Vol. 100、No. 947、8-12頁（加藤2002に再掲）

---

(2) 例えば山本剛史の諸論考を年代順に追っていくと、議論の展開の過程がよくわかる。山本は、1999年と2000年のヨナスと世代間倫理についての論考（リスト参照）を経て、2007年には「予防原則の倫理学序説—欧州の実践と責任倫理を手掛かりに」上智大学哲学会『哲学論集』第36号、75-90頁、2008年には「予防原則の倫理学に向けて—ディードリッヒ・ボンヘッフアーにおける「代理」の責任概念の可能性」慶応大学倫理学研究会『エティカ』第1号、103-128頁といった論考を執筆している。また蔵田伸雄の1998年の論考と2009年の論考（リスト参照）を読み比べても、この間の問題意識の推移がよくわかる。

- 盛永審一郎（1997）「状況的責任から配慮責任へ——世代間倫理の原理へむけて」『富山医科大学一般教育』18、11-23頁
- 宇佐美誠（1998）「配慮の射程——環境倫理学と公共政策」『公共政策——日本公共政策学会年報1998』1-33頁
- 吉野貴好（1998）「環境倫理学の課題——世代をめぐる」筑波大学倫理学研究会『倫理学』15、63-73頁
- 高津融男（1999）「将来世代に対する義務の正当化について：アヴネール・デ・シャリットによる世代間正義の共同体論的アプローチを中心にして」『同志社法学』260号、41-114頁
- 小林和之（1999）「未来は値するか——滅亡へのストラテジー」井上達夫ほか編『法の臨界Ⅲ——法実践への提言』東京大学出版会、3-22頁
- 高橋広次（1999）「未来世代への責任と種の法理」『社会と倫理』6、1-23頁
- 山本剛史（1999）「世代間倫理におけるハンス＝ヨーナスの思想」上智大学大学院哲学研究科現代哲学研究サークル『上智哲学誌』第12号、63-72頁
- 竹内昭（2000）「もう一つの〈世代間倫理〉の試み——環境倫理学の一基本問題の考察」『法政大学教養部紀要 人文科学編』（通号112）、1-24頁
- 渡辺忠（2000）「将来世代に対する義務とは何か——世代間倫理を吟味する」『白鷗法学』第16号、93-114頁
- 山本剛史（2000）「世代間倫理の意味——自己利益に基づかない倫理の可能性を探る」上智大学哲学会『哲学論集』29、83-97頁
- 小林陸（2000）「環境倫理学における世代間倫理の可能性——「相互性」概念をめぐる」（シンポジウム「普遍的な環境倫理は可能か」）『東北哲学会年報』Vol. 16、70-79頁
- 小坂国継（2001）「世代間倫理と公正の問題」日本大学経済学研究会『研究紀要』第33号、1-15頁（小坂2003に再掲）
- 岩井克人（2001）「未来世代への責任——経済学の「論理」と環境問題の「倫理」」『朝日新聞』8月3日夕刊、13面
- 池田和弘（2002）「世代間倫理の（不）可能性——有限性の環境哲学」東京大学大学院人文社会系研究科修士論文
- 馬淵浩二（2002）「環境倫理学と正義の問題」『中央学院大学 人間・自然論叢』91-108頁
- 紀平知樹（2003）「「持続可能な開発」の倫理——世代間倫理の基礎づけの試み」大阪大学大学院文学研究科哲学講座『メタフュシカ』34、97-107頁
- 池田和弘（2003）「世代間倫理における非同人性問題——解決の不可能性と事後承認によるその無化」『ソシオロギス』27、1-16頁
- 笹澤豊（2003a）「環境倫理と未来世代問題」筑波大学哲学・思想学会『哲学・思想論叢』第21号、91-102頁（笹澤2003bがほぼ同様の内容）
- 宇佐美誠（2004）「将来世代・自我・共同体」一橋大学経済研究所『経済研究』第55巻1号、

1-14頁

- 徳原悟(2005)「環境倫理学における世代間倫理の問題」『芝浦工業大学研究報告(理工系49-2)人文系編』Vol. 39、No. 2、109-116頁
- 吉良貴之(2006)「世代間正義論——将来世代配慮責務の根拠と範囲」『国家学会雑誌』119巻5-6号、23-87頁
- 水野菜々子(2006)「環境問題の中の「将来世代」——For Future Generations と思っているのは誰？」東京大学大学院情報学環・学際情報学府修士論文
- 佐藤啓介(2008)「世代間倫理と隣人愛——ハイモダニティにおけるキリスト教倫理の可能性」宗教倫理学会『宗教と倫理』第8号、51-65頁
- 清水俊(2008)「未来倫理とは何か」『先端倫理研究：熊本大学倫理学研究室紀要』3、69-76頁
- 森岡正博・吉本陵(2008)「将来世代を産出する義務はあるか？——生命の哲学の構築に向けて(2)」『人間科学：大阪府立大学紀要』4、57-106頁
- 古賀徹(2009)「環境的正義と世代間倫理——ロールズ貯蓄原理の考察」日本哲学会『哲学』60、153-167頁
- 寺本剛(2010a)「世代間倫理と未来世代の権利」中央大学人文科学研究所『人文研紀要』第68号、211-232頁
- 寺本剛(2010b)「環境倫理におけるヨナス倫理想の意義」『中央大学文学部紀要 哲学』52、43-59頁
- 吉田雅章(2010a)「われわれの道德共同体の成員は誰か？——Martin P. Goldingの「未来世代への責務」論の検討」『長崎大学総合環境研究』第12巻2号、101-111頁
- 吉田雅章(2010b)「現在世代による権利の過剰行使——Callahanの「我々はどうな責務を未来世代に負うのか」の検討」『長崎大学総合環境研究』第13巻1号、59-71頁

### 「世代間倫理」をより具体的な問題や現場に結びつけて論じている論考

- 小阪康治(2003)「高レベル放射性廃棄物と倫理——未来世代への責任について」日本大学経済学部経済科学研究所『経済科学研究所紀要』第33号、83-94頁
- 武田邦彦・那須昭子・丸山宣広(2003)「高レベル廃棄物の世代間倫理からの考察」『日本原子力学会和文論文誌』第2巻第1号、1-8頁
- 村上陽一郎(2005a)「INTERVIEW 意思決定を担う生活者 未来の人への責任を果たす世代間倫理(特集 国や企業の先行く市民——生活者がひらく持続可能社会)」宣伝会議『環境会議2005秋号』、156-159頁
- 村上陽一郎(2005b)「予防原則と世代間倫理」東京大学環境三四郎「環境の世紀」編集プロジェクト『エコブームを問う——東大生と学ぶ環境学』学芸出版社、29-40頁

- 土屋恭子・倉本龍・磯崎哲夫（2007）「中学校理科における「世代間倫理の基礎的概念」形成に関する理論的・実証的研究」日本理科教育学会『理科教育学研究』Vol. 48、No. 1、2007、63-73頁
- 田中久男（2009）「CSR（企業の社会的責任）と世代間倫理」日本内部監査協会『月刊監査研究』2009-9（通号425）、70-74頁

環境倫理学を全般的に論じた著作のなかに、「世代間倫理」の章・節を設けているもの

- 加藤尚武（1991）『環境倫理学のすすめ』丸善ライブラリー、第3章、第9章、第10章
- 谷本光男（1994）「環境問題と世代間倫理」谷本光男・加茂直樹編『環境思想を学ぶ人のために』世界思想社、Ⅲ-3（谷本2003に再掲）
- 蔵田伸雄（1998）「『未来世代に対する倫理』は成立するか」加藤尚武編『環境と倫理——自然と人間の共生を求めて』有斐閣、第5章
- 谷本光男（2003）『環境倫理のラディカリズム』世界思想社、第3章（谷本1994と同じ）
- 小坂国継（2003）『環境倫理学ノート——比較思想的考察』ミネルヴァ書房、第4章（小坂2001と同じ）
- 笹澤豊（2003b）『環境問題を哲学する』藤原書店、第3章（笹澤2003aがほぼ同じ内容）
- 山内廣隆（2003）『環境の倫理学』丸善、第9章
- 木村博（2007）「より狭義の具体倫理学としての自然倫理学」山内廣隆ほか『環境倫理の新展開』ナカニシヤ出版、第12章
- 蔵田伸雄（2009）「責任・未来——世代間倫理の行方」鬼頭秀一・福永真弓編『環境倫理学』東京大学出版会、第5章
- 高橋広次（2011）『環境倫理学入門——生命と環境のあいだ』勁草書房、第6章第1節

応用倫理学や現代倫理学を全般的に論じた著作のなかに、「世代間倫理」の章・節・項目を設けているもの

- 栗原隆（2001）「責任と合意——将来世代に権利は認められるか」加藤尚武編『共生のリテラシー』東北大学出版会、83-97頁（改稿され栗原2010に収録）
- 加藤尚武（2002）『合意形成とルール倫理学——応用倫理学のすすめⅢ』丸善ライブラリー、第14章（加藤1997と同じ）
- 田村公江（2002）「環境と倫理」加藤尚武・松山壽一編『改訂版 現代世界と倫理』晃洋書房、第3章第3節
- 徳永哲也（2003）『はじめて学ぶ生命・環境倫理——「生命圏の倫理学」を求めて』ナカニシヤ出版、第8章、第9章
- 小阪康治（2006）『応用倫理学の考え方——生命・環境・経営倫理と社会問題』ナカニシヤ出版、

第3章第2節

- 山本剛史（2006）「世代間倫理」小松光彦・樽井正義・谷寿美編『倫理学案内——理論と課題』慶應義塾大学出版会、第Ⅱ部第1章
- 牧野広義（2007）『現代倫理と民主主義』地歴社、第6章
- 屋良朝彦（2007）「世代間倫理——ヨナス」坂井昭宏・柏葉武秀編『現代倫理学』ナカニシヤ出版、第4章第4節
- 栗原隆（2010）『現代を生きてゆくための倫理学』ナカニシヤ出版、第11章
- 馬淵浩二（2010）『倫理空間への問い——応用倫理学から世界を見る』ナカニシヤ出版、第4章

「世代間正義」「世代間衡平性」についての政治/法/経済哲学の著作

- 鈴木興太郎編（2006）『世代間衡平性の論理と倫理』東洋経済新報社  
鈴木興太郎「世代間衡平性の厚生経済学」（第1章）、鈴木興太郎・篠塚友一「世代間衡平性への公理主義的アプローチ」（第2章）、宇佐美誠「将来世代への配慮の道徳的基礎」（第10章）、森村進「未来世代への道徳的義務の性質」（第11章）、長谷川晃「共通善・時間・責任」（第12章）、後藤玲子「世代間正義の原理とその制定手続き」（第13章）
- 鈴木興太郎・宇佐美誠・金泰昌編（2006）『公共哲学20 世代間関係から考える公共性』東京大学出版会
- 宇佐美誠（2011）『その先の正義論——宇佐美教授の白熱教室』ランダムハウスジャパン、第2章
- 田中愛治監修、須賀晃一・齋藤純一編（2011）『政治経済学の規範理論』勁草書房  
宇佐美誠「グローバルな正義と歴史上の不正義」（第3章）、斉藤尚「世代間正義と立憲主義：ロールズの貯蓄原理を中心に」（第12章）

「世代間倫理」に関連する項目を含んでいる事典

- 尾関周二ほか編（2005）『環境思想キーワード』青木書店  
牧野広義「世代間倫理」120-121頁
- 大庭健編集代表（2006）『現代倫理学事典』弘文堂  
蔵田伸雄「世代」527-528頁、丸山徳次「世代間倫理」528頁
- 加藤尚武編集代表（2007）『応用倫理学事典』丸善  
加藤尚武「責任倫理と未来倫理」158-159頁、谷本光男「世代間倫理」160-161頁、本田裕志「持続可能」84-85頁